

お茶うけ 第69話

イルカ健康診断

江ノ島水族館のマリンランドで、3頭のイルカのショーを楽しみました。イルカたちはマリンエンジェルと呼ばれる女性トレーナの指示に従って、300Kg以上もあると思われる巨体で空中に軽々と垂直に躍り上がり、大きな円弧を描くようにジャンプし、尾の力だけで水面から立ち上ってみせ、横泳ぎして水面に胸びれを出しながら旋回します。ある時は、一斉にトレーナの立つプラットフォームに跳び上がり、腹這いになりました。3頭の一条乱れぬ躍動を見て、これこそ華麗なシンクロナイズドスイミングの元祖であると感心しました。



次に、2頭のハナゴンドウのショーがプールの中央で始まりました。ハナゴンドウたちは、立ち泳ぎの格好で水面から体を出してくるくる回転してみせました。その間、プールの片隅で一休みしていた3頭のイルカたちは、別のマリンエンジェルの手じゃれていましたが、彼女の一つの仕種に反応して一斉にくるりと仰向けになりました。3頭がお腹を見せてプカプカ浮いている様子は、いかにもユーモラスです。

私は、これが本で読んだ「ハズバンドリー・ビヘービア」という動作に違いないと思いました。それは、イルカがトレーナの手のサインに従って、健康診断を受けやすい姿勢をとるもので、通常のトレーニングの一貫として、仰向けに腹を出したり、背ビレを出したりすることを教えます。

この「ハズバンドリー・ビヘービア(受診訓練動作: husbandry behavior)」は、1986年の国際海獣類トレーニング協会(IMATA)の会で初めて発表され、今では日本全国的水族館で、イルカやアシカなど海獣類の健康管理に広く取り入れられています。

イルカの場合は、体温測定は仰向けにして肛門にサーミスター・プローブを入れて行い、血液測定は背ビレをプール側面に出させて採血し、胃液検査は口内にチューブを入れて採取します。また、腹部の超音波映像診断で、飲み込んだ異物の確認や、妊娠中の胎児の位置の確認ができるそうです。

この方法を導入する以前は、イルカ健康診断するには、大きなプールの水を抜き、イルカを押さえつけるようにして、体温測定や血液採取を行う方法しか無かったので、どうしてもイルカにストレスを与えてしまいました。また作業も大変なので、そんなに頻繁に行うことができず、イルカの体調不良に気づくのが遅れたりしました。

この「ハズバンドリー・ビヘービア」により、健康診断が手軽にできるようになって、イルカの健康維持に大変役に立っています。

私は、イルカとハナゴンドウのショーを終えて控室に戻るトレーナーに、先程のイルカが腹を見せた動作は「ハズバンドリー・ビヘービア」の一つですかと尋ねますと、彼は、「その通りです。毎朝実施しています」と誇らしげに答えてくれました。

私は今まで、水族館で呼び物の「イルカのショー」などを見たとき、いつも心の片隅で、人間の楽しみのためにイルカに無理をさせているような痛みを感じていました。

しかし、今や水族館にいるイルカの多くが日本生まれの二世、三世の世代であり、母イルカと共に生活できるとしても、母以外に接するのは同じイルカの群れではなくて人間なのです。こういうイルカたちと暖かい心を通わせ共生を心がけるのが、人間の役目であると思うようになりました。

水族館でイルカをトレーニングするのも、イルカ本来の運動能力を引き出し、運動の様子で体調を知り、ストレスの少ない検診で健康管理に細かく気を配り、成年に達すればペアリングを考えてやるなどして、健康な生涯を送らせることにあるとのこと。そして、「イルカのショー」は子供にも大人にも訓練の成果を見せて、イルカの優れた能力を知ってもらうものと位置づけています。

現在は地球の環境が大きく変わりつつあるので、水族館と動物園が、種を保存する場所として期待されています。他の動物たちにも、それぞれに適した「ハズバンドリー・ビヘービア」の手法が開発されることを期待したいと思います。

以上

参考文献:

『水族館のはなし』 堀 由起子著 岩波新書

『水族館を究める』 毛利 匡明監修 徳間書店刊